

尾瀨谷のつぼみ

創刊号

2007.05 vol.1
(財)尾瀨保護財団



VOL. 1

創刊号
2007.05

目次

- 03 理事長あいさつ
「はるかな尾瀬」の刊行に寄せて
- 04 リレーエッセイ
早春の彩り?— 尾瀬のアカシボ
- 06 トピックス
第24回理事会・評議員会
- 07 至仏山対策から考える尾瀬の将来
- 08 エッセイ 尾瀬好日
武田久吉先生のお供して
尾瀬² = 私
- 10 現地情報
原をわたる風だより
おこじよだより
- 12 連載コラム
「村の宝を時代・世代を越えて伝え続けたい」
— 檜枝岐歌舞伎
「ゆったりのんびりがモットーの山小屋」
— 原の小屋
- 14 尾瀬ボランティア情報
「友の会」コーナー
- 15 イベント情報
新職員紹介

「今月の表紙」



至仏山とリュウキンカ

表紙題字／財団法人尾瀬保護財団
理事長 小寺 弘之

「はるかな尾瀬」の 刊行に寄せて

財団法人尾瀬保護財団

理事長 小寺 弘之



緑陰の山道やまみちから木道を歩いて尾瀬に入っていくと、5月下旬には澄んだ青空の下、白いミズバショウが湿原一面に顔を出しています。幾度訪れても新鮮な感動を与え、生命の息吹を感じさせてくれる、それが尾瀬です。

尾瀬には、長い歴史とともに、先人たちの深い想いがあります。昭和9年に国立公園として指定されて以来、昭和41年にアヤマメ平の植生復元、昭和47年にごみ持ち帰り運動、昭和49年にマイカー規制、さらに近年は、至仏山の保全対策、野生動物対策など先進的な取組みが行われたことにより、尾瀬は、自然保護の原点と言われています。また、平成17年11月には、国際的にも重要な湿地として「ラムサール条約湿地」にも登録されました。

さて、尾瀬の周辺地域をよく眺めてみると、会津駒ヶ岳、田代山や帝釈山などに同様の森林や湿原を見ることができると、従来から原生的な自然を残す尾瀬との一体的な管理の必要性が指摘されています。

おととしの尾瀬サミットにおいては、尾瀬が独立した国立公園でも良い

のではないかという考えが示されましたが、財団が関係のみなさんからの協力をいただき、尾瀬の今後の進むべき方向を示した「尾瀬ビジョン」を取りまとめたところ、このような認識が急速に広まってきました。さらに、関係機関の準備も進み、尾瀬は、この夏にも日光国立公園から独立して、いよいよ「尾瀬国立公園」へと生まれ変わります。

私たち尾瀬関係者には、これからの未来に向けて、尾瀬の自然環境を永く保ち後世に伝えるとともに、多くの人が21世紀の新しい国立公園である尾瀬を訪れ、豊かな自然を体験できるよう、尾瀬ビジョンに沿った積極的な行動が期待されています。

ここに、尾瀬をもっと知り、親しむための情報を提供するとともに、尾瀬を愛する人々の交流の場となるよう機関誌「はるかな尾瀬」を刊行いたしました。この機関誌が多くの方の目に触れ、また多くの方に誌上に参加していただくことにより、尾瀬がもっと身近になり、尾瀬を訪れる感動が世界に広がっていきますよう祈念しております。

悠久の時が過ぎても、ミズバショウ、ニッコウキスゲ、オゼヌマアザミ、エゾリンドウなどの花々が次々と咲き誇り、オコジョが遊び、ツキノワグマが共に棲み、ルリイトトンボが戯れる「尾瀬」が、そこにいつまでもありますよう心から願ってやみません。

リレーエッセイ

早春の彩り?—尾瀬のアカシボ

福原 晴夫

今年のタイミングはどうであろうか?

ここ数年4月になると、尾瀬の雪の深さと雪解けの速さを気にしながら、入山の時をはかっている。ミズバショウも良いけれど、それとはちよつと違う。その半月ほど前の約1週間を最盛期とするアカシボの時を待っているのだ。

前号で野原氏がふれたが、「アカシボ」は尾瀬で平年であれば5月の連休前後に雪の表面が赤褐色となり、融雪とともに消えていく「アカユキ」現象の一種である。(写真1A)あまりにも早い生成と消滅のため、尾瀬の風物詩として特にとりあげられることもなく、この頃入山する登山者や山小屋関係者にも知られている現象ではなからうか。アカシボの原因を探るため、登山好きの研究者とグループを組んで最良のタイミングを見ながら、入山しているが、何分にも年に1回の短期間の調査であり、なかなか研究が進まない。

アカシボは融雪水が雪と地面の間を流れ始める頃、下から赤く着色し、だんだんと上に着色域

が広がってくる。(写真1B)表面から雪が溶かされるにつれて80〜50cmになると、雪の表面が広範囲に茶褐色に変色していく。後期になるとますます赤みは増し、雪上の窪みに水たまりまでできる。発達過程は現象として捉えられるが、雪解け時から始まるアカシボ形成のメカニズムは、雪と地表面の境界面での酸化鉄の溶解や酸素の減少、雪解け水の浸透、地形の傾斜などさまざまな要因が関係し、解明にはまだ時間が必要だ。

アカシボの本体はなんであろうか。これが最大の疑問である。着色したアカシボは鉄が95%も占めるなど圧倒的に多い。

しかしこれだけではない。アカシボを顕微鏡で観察すると、約15ミクロンほどの赤褐色に着色した粒子が多数見える。(写真2A)世界の「アカユキ」の原因となっているのは主にクラミドモナス属などの緑藻類の休眠孢子である。

しかし尾瀬の赤褐色の粒子はこれとは異なり、細胞の周りに酸化鉄を付着させた緑藻類の *Heteronema* 属の二種の休眠孢子でないかと考え研究を進めている。アカユキからは報告されていない種である。

アカシボを実験的に再現することが大きな課題となっている。DNAを用いた分子遺伝学的手法

でもアカシボ微生物群集をさぐっている。これまでに鉄の酸化に関係する鉄酸化細菌をはじめ多様な微生物群が検出されている。新しい課題である。

私にとつての驚きはアカシボ雪の中に実に多様な小型の動物が存在していることであつた。クマムシ類、渦虫類、ケンミジンコ類、線虫類、ミズダニ類、ソコミジンコ類、ミミズ類、昆虫の幼虫ではユスリカ類、ガガンボ類、スカカカ類、センブリ類と実に多くの分類群を含み、総密度は4万個体/m²に達するほどであつた。(写真2B)これまでアカユキの中にガガンボ幼虫やミミズのような大きな動物が報告された例はなかつたのである。

ある日の雪原にはマツバを散らしたようにユスリカやガガンボの幼虫も見つかった。(写真2C)いったい彼らは、どこから、どのような理由で、雪の中に現れたのか、動物の出現はアカシボの発生とどこまで関係があるのか。アカシボ動物の中には、氷河のコオリミミズのようにアカシボ雪の中で適応して積極的に生活している動物がいるのかどうか、興味のある課題が残っている。

尾瀬のアカシボの研究には、どのような意義があるのだろうか。アカシボ現象は尾瀬だけにとどまらないが、尾瀬ほど大規模なものはない。何よりも新しいタイプのアカユキだ。

尾瀬のどのような地形・地質や水文学的な背景でアカシボが大規模に発達するのか。尾瀬の湿原生物の多様性を担うアカシボを構成する多くの生物の種は、どのような分類学的な位置を占めるのか。低温で活性を示すアカシボ生物は低温耐性の研究材料としても重要だ。雪表面で生育するアカユキの構成生物は、紫外線耐性機構の研究の材料としても注目されている。もし、火星などに地球外生命が存在するならば、アカユキの構成生物のようなものではないか、と考えている科学者もいるのである。

アカシボの研究には多くの課題がみつまっている。大規模なアカシボの発生する尾瀬は、これまでにないアカユキ研究の場としても重要である。しかし、最近のいわゆる異常気象はアカシボ発生のタイミングをくるわせ、我々の尾瀬入山のタイミングをますます難しくさせている。

筆者紹介

福原 晴夫（ふくはら はるお）

新潟大学教育人間科学部教授

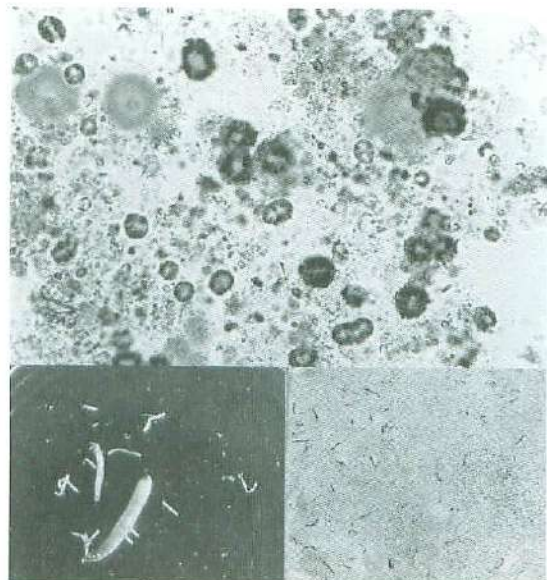
専門は陸水生態学

著書に「水界生物生態研究法Ⅰ」淡水の魚類とペントスター

（共著）（共立出版）など



▲1A: 山の鼻研究見本園付近に発達したアカシボ(左の縦写真1B: アカシボ中期の頃の雪のコア—直径4cm)



▶上2A 酸化鉄で濡われた休眠胞子とみられる赤褐色の種子

▶下左2B アカシボ雪の中の動物、大型はガガンボ幼虫

▶下右2C アカシボ地帯の雪上にマツハのように散らばるユスリカやガガンボの幼虫



尾瀬保護財団 第24回理事会・評議員会

尾瀬保護財団理事会・評議員会が本年3月26日に都道府県会館（東京都）において開催され、平成18年度収支予算の変更、平成19年度事業計画、同収支予算が原案とおり決定されました。また、任期満了に伴う役員を選任及び辞任に伴う評議員の選任が行われました。その他、財務規程の改正が原案とおり決定されました。なお、19年度の主な事業計画は次のとおりです。

1 利用者啓発事業

① 入山者啓発事業

ア 入山口啓発：主な入山口において入山マナーの啓発、利用案内、ゴミの持ち帰り運動等を実施します。

イ 尾瀬ボランティアの活動支援：活動拠点の整備やボランティアのための研修会を開催します。

ウ ガイド利用の普及促進：（新）ガイド資格認定制度の今後の創設を目指し、ガイドルールや認定制度の骨子を検討します。

尾瀬ガイドネットワーク事業、尾瀬自然解説ガイド事業により、入山者のガイド利用の普及促進を図ります。

② 自然解説事業

尾瀬沼・山の鼻のビジターセンターの職員等により自然解説活動を実施します。

（新）地元等が取り組む周辺地域を含めたモデルエコツアアの催行を支援します。

③ 啓発PR事業

ア 機関紙の発行：（新）「はるかな尾瀬」を年4回発行します。

イ わたしの尾瀬フォトコンテスト：写真コンテストを行い、写真展、尾瀬フォーラムを開催します。

2 施設管理事業

① 尾瀬沼ビジターセンター等の管理運営（環境省委託）

② 尾瀬山の鼻ビジターセンター等の管理運営（群馬県委託）

③ 公衆トイレの維持管理

3 調査研究事業（国立公園利用適正化推進事業）

利用の適正化を図る手法、安全で快適な利用の確保等について調査研究を行います。

（新）交通対策を検証するための効果調査・ヒアリング調査、ツキノワグマ対策、（新）至仏山東面登山道の保全に資するためのヒアリング調査・事例調査他を行います。

4 顕彰事業

研究者から論文を募り、優れた業績に「第十一回尾瀬賞」を授与します。

5 友の会事業

財団活動に対し、幅広く支援を求めするため、加入を呼びかけます。

6 その他

① 尾瀬サミットの開催

開催時期：8月30日～31日

開催場所：山ノ鼻地区

② 寄付金の募集：特定公益増進法人の認定制度を活かし、財団への寄付を積極的に募るなど、尾瀬及び財団へのサポート体制をつくります。

③ 物品の販売（特別会計）：尾瀬の自然保護や安全な利用に資するガイドブックなどの書籍・地図、フォトカレンダー等を購入、作製して販売を行います。

④ （新）尾瀬国立公園の実現を祝うとともに、広くお知らせするため、記念事業準備委員会により、統一ロゴマークの制定、DVD・パンフレットの制作、PRイベントなどを行います。



▲尾瀬保護財団第24回理事会

至仏山対策から考える 尾瀬の将来

横浜国立大学大学院教授

加藤 峰夫

青空に柔らかな線を描いて優美に聳える至仏山。しかし、その登山道の一部は崩壊が進み、尾瀬ヶ原から眺めてもはつきりとわかる茶色の傷になっていきます。

私はこの数年、至仏山の環境保全対策に参加する機会を得ました。調査と検討の結果は、この春、ようやくまとまった報告書となり、次はその提案をもとにした具体的な活動の段階に入ります。

しかし、現在の悩ましい問題を改善し解決することは急務ですが、さらにその先に、「こうあつて欲しい」と思う至仏山の姿をイメージしてみることも大切なのではないでしょうか。たとえば、私の考える、将来の（それも近い将来の）至仏山は、環境の保全とその楽しみ方の両方を今よりも高いレベルで組み合わせたい、次のようなものです。

春、鳩待峠への道路が開通してからゴールデンウィークまでは、雪を求めて訪れる人々に、真っ白な大斜面で、尾瀬ヶ原に吸い込まれていくようなスキーやスノーボードを楽しんでもらいたいです。もちろん、雪の下で芽吹き準備をしている植物を傷めることがないようなコースの情報を、こまめな積雪調査をも

とに、的確に提供することが大前提となります。

初夏、雪融けが進む頃には、今まさに花を開こうとしている高山植物の姿を訪ねるエコツアーが提供されます。その時季、これまでは植生保護のために至仏山は立ち入りが規制されています。

しかし、たとえば登山道の一部がまだ雪の下であつても、安全確保技術の面はもちろん、生態系と環境配慮にも十分な知識を持つしつかりとしたガイドの付き添いと、場合によっては人数制限を条件とするならば、何も立入禁止にしないでよいのではないのでしょうか。信頼できる、知識と能力のあるガイドの養成は大きな課題ですが、実現するならば、これまでの尾瀬にはなかつたような本格的なエコツアーとなるでしょう。

さらに、夏が近づいてきます。残雪状況のチェックと登山道の整備をこまめに行うならば、登山道が利用可能になればすぐに、多くの人に登山を楽しんでも



▲雪を被った至仏山

らえます。夏から秋にかけて至仏山を訪れる人々は、一部を環境影響の少ない場所に付け替えた登山道を利用し、至仏山と、そしてそこから眺める尾瀬ヶ原の姿を楽しむことでしょうか。

そして、冬、山小屋も閉じ、尾瀬とその周囲は深い雪におおわれます。冬の尾瀬は、現在に入つてもよいのかどうか、あまりはつきりとしないう取り扱いはなっています。

しかし、その冬にこそ、尾瀬、特に至仏山と燦々岳は、まさにウイルダネス（原始の自然）と呼ぶべき厳しくも壮麗な自然に戻ります。そのなかを、重たい荷物を背負い、深い雪をかきわけてでも入って行きたいという人たちがいるならば、それをダメだといって禁止することは無いと思います。入山届や山岳保険等の手続きを含むしつかりとした準備を前提に、「荘厳な冬の至仏山」を経験してもらつてもよいのではないのでしょうか。これも、今まではほとんど考えられてこなかつた、「ウイラダネスとしての尾瀬」という新しい体験です。

もちろん、以上は私の勝手な夢に過ぎません。しかし、至仏山には、そして尾瀬には、美しい自然をしつかりと守り伝えていくためにも、そしてその自然を楽しむという点でも、まだまだたくさん可能性はあるはず。「可能性がある」ということは、「それなのに、これまで十分にやつてこなかつた」という意味では反省すべきことなのかもしれません。「まだまだやるべきことや、やれることがたくさんある」と考えるならば大きな希望です。その希望に向つて着実に歩みを進めていくことが、さらに素晴らしい「みんなの尾瀬」への道であり、しかもその目的地は、かなりはつきりと見えてきたのではないのでしょうか。

『武田久吉先生のお供して』

武田先生に始めてお会いしたのは昭和42年4月で、日光国立公園では尾瀬の公園計画「尾瀬を守る計画」が発表され、池袋の東武デパートで地図上にルートの変更が示された。

厚生省国立公園部の当初の計画では尾瀬沼南岸を通る予定だったが、モーターリゼーションの時代を迎えルートを変更して、現在の特別保護地区の外側に移すものだった。(それから4年後、昭和46年に問題になった三平峠付近を通過する観光道路につながって行く。)

これを平野長英さんはわざわざ確かめに上京され、その足で靖国神社裏にあった武田先生のお屋敷を訪ね、一緒に同行した時である。武田先生は植物の生態を研究のため、お庭にはたくさん的高山植物が鉢植えされ、尾瀬のミズバショウも花を咲かせていた。

長英さんは尾瀬の道路ルート変更を武田先生に報告すると共に、先生が尾瀬へ来られるとき私に同行してほしいと云われた。早速その年の5月下旬から6月上旬にかけて三泊四日で尾瀬行きの計画が立てられた。

私はまだかけだしの教員だったので、何らかの理由をつけて学校を休ませてもらった。初日列車の中

では各地の地名のいわれなど話され、先生の博識なのに驚かされた。

第二次世界大戦未明、民俗学の調査で、旧沼田町の郊外で道祖神の写真を書いていると、当時の沼田の警察官にスパイと疑われ(先生の風貌はイギリス人)、それを晴らすのに旧沼田中学校長だった友人の安達成之先生に連絡し、うたがいを晴らしてもらったエピソードなど、貴重なお話をいろいろ伺うことが出来た。(安達先生は昭和9年高崎郊外であった旧陸軍の大演習の際、尾瀬の写真帳・武田先生撮影・他資料を天覧に供し、当時の昭和天皇に説明され、その資料をもとに沼田中学校に「尾瀬教室」を作られた。)

大清水から三平峠の登りはたった二人の山行きだったので十分時間をかけて歩くのだが、めばしい



▲写真 右側 武田久吉先生、中央 同夫人、左側 平野長英さん

植物に接すると、先生は背負っていたリックをおろし、おもむろにカメラを取り出し、まずその植物の生態をそこなわないように回りの掃除をして、何枚かシャッターを切

り、ポケットから小さな野帳を出し、植物名その他、カメラのデータ等を細かに記入する習慣だった。

三平峠の登りで84歳になられた先生を心配して、先生の荷物を私が背負いましょうと問いかけても、御自分のものは自分の身から離さなかった。峠を越えて尾瀬沼に達したのはすでに夕暮れになり、長英さんが心配して三平下まで迎えに来てくれた。

山では決して急がない、自然をじっくりみつめる目は、私にとっては大変な驚きと共に自然に対する先生の愛情のようなものを感じとった。次日、長蔵小屋の裏庭に長英さんが大事に育てているトガクシシヨウマを観察したのち、尾瀬ヶ原に出て、樋ヶ岳裏、大反沢(おほひざわ)のトガクシシヨウマの群生地を訪ねた。ちょうど開花中で、中に白花(しろはな)のものがあることをその時始めて発見した。

下田代の十字路では、昔から尾瀬沼と尾瀬ヶ原、富士見峠と温泉小屋方面への道が交わる場所、まさに「十字路」であるが、いつの頃からか見晴(みはり)と変えられていることを、地名等にも詳しい先生は御不満のようだった。

この時の四日間私が今まで尾瀬を始め、奥利根の山々をかけまわっていたことを大いに反省し、その後の山歩きの方、自然への接し方などすっかり変えてくれた山旅だった。

『²尾瀬 II 私』

尾瀬、なんと心地良い響きでしょう！

尾瀬、私にとっては心安らぐ場所の一つです。あの尾瀬ヶ原の開放的な緑の空間、そして尾瀬沼を渡る風の心地良さ、嫌な事を忘れさせ良い事だけしか想い出させない涼風、そして雪解けと共に顔を出す座禅草、水芭蕉の花、至仏山の雪が消える頃、尾瀬ヶ原では朝霧が薄れて行くところ、さざ波のように揺れるワタスゲの白い穂の広がり、真夏には湿原をオレンジ色に染めるニッコウキスゲ、秋の草紅葉、また春から秋にかけて派手さはありませんが、多種多様の可憐な花、また、出会うところちが紅潮する様な豪華な花も咲きます。

尾瀬の栄養分が少なく気象条件の厳しい土地で、気の通くなる様な年月を人に知られずに生きて来たこの花々、今は人々に安らぎと感動を与えてくれる尾瀬、この自然を荒廃させる訳にはいきません。今、地球規模で生活環境を守る事の重要性が言われています。それから見れば尾瀬は余りにも小さくそして私に出来る範囲はもっと小さい事ですが、大好きな尾瀬の花達のために、また私自身の楽しみを兼ねて尾瀬保護財団ボランティア

の募集に応じました。あれから11年、すこしでも尾瀬の役に立つたかしら？

まずボランティアは楽しくなくてははいけません。心楽しいと自然に笑顔になり、入山口での啓発活動も湿原の中でのお話ボランティアでも、相手の方々に喜んでもらえれば私もまた楽しくなるといふ相乗効果を生みます。

ボランティア活動を始めた頃に比べれば、近年は入山者のマナーも良く、ゴミも格段と少なくなりました。これも環境省始め関係各県の協力、尾瀬保護財団は元より山小屋の皆様、地元の関係団体各位そして尾瀬ボランティア仲間等の努力により、尾瀬を訪れる方々の自然への意識も高くなってきました。そしてその成果の一つとして、2005年ラムサール条約に加盟する運びとなりました。

でも楽しさに夢中になって思わず湿原に足を踏み入れたり、ゴミを落とした事に気付かず立ち去ったり、木道上で人の迷惑になったりと、ボランティアの重要性に変わりはありません。楽しみの一つに人との出会い触れ合いがあります。ゴミを拾い入山者にマナーを説明したり、花の名前を聞かれ、コースの相談を受けたりと、自分も勉強の毎日です。

でも気持ち良く聞き届けてもらえたり、「ありがとう」楽しかった「詳しく解って良かった」等と言っ

て頂けたその一言が心に浸みます、そんな時、花達までもが微笑んでいる？ 様に見えるから不思議ですね！「人と人の心は鏡である」という意味の言葉があるそうですが真にその通りですね。

今年も尾瀬のシーズンが幕を開けました。すでに気持は尾瀬を漂っています、尾瀬の好きな方、私達共々自然から、尾瀬から、花々から、また訪れる方々から、楽しみを分けて頂きませんか！？



▲山の景ビジターセンターでの除雪作業

原をわたる風だより

2007年尾瀬ヶ原の シーズンが始まりました

毎年、尾瀬のシーズンは終了後、閉鎖した山の鼻ビジターセンター（以下、山の鼻V.C.）・公衆トイレ等施設内外の点検確認（気象観測機器の作動状況、凍結防止等）のため、11月と3月に、財団職員などで調査隊（7〜8名）を編成し尾瀬に入山しています。今回は3月の尾瀬の様子をお知らせします。

関東平野では花の便りが聞かれる頃ですが、群馬・福島・新潟の3県境に位置する尾瀬ではまだ春遠い厳冬期、残雪は山の鼻V.C.周辺で2〜3mあり、快晴の朝はマイナス20度前後まで冷え込みました。

尾瀬には4日間滞在しましたが、晴れた日は1日のみで、朝、屋外に出てみると新雪が20〜30cm積もり、数

十m先は吹雪のため真っ白、時には施設周囲の樹木が霞みモノクロの世界の日もありました。

そんな厳しい気象条件の中で、職員は各自スコップやスノーダンプを持ち、屋根に這い上がり雪下ろしをしたり、施設の入出口、防雪雨戸周辺の除雪作業をしました。

また、この時期、尾瀬ヶ原に架かる橋の点検除雪にも行きますが、靴だけで歩くことは困難です。スキー・スノーシュー・かんじき（曲げ輪）などの装備を付け、龍宮小屋付近の沼尻川橋（山の鼻地区から約5km）までの移動と作業で1日がかりとなります。

そんな厳しい自然の中でも、尾瀬ヶ原ではいろいろな発見があります。フィールドサインと言われる、シカ・キツネ・タヌキ・野ウサギ・テンなど動物や野鳥の足跡が雪面にあり、これはなんだ？となかなか楽しいものです。

また、尾瀬ヶ原では風の通り道とい

うか、吹き回して雪が多く付いているところもあれば、場所により湿原が出ている箇所もあります。これは沢水の流れ込みの影響かと思えます。湿原をのぞいて見ると、芽は堅そうですがミズバショウの緑の新芽が、林内ではトチノキの枝先にネバツこいふつくらした褐色の新芽が見られ、まもなく来る尾瀬の香を感じます。

今年例年にくらべ残雪が少なめで、ミズバショウ・リュウキンカ等の開花見頃は5月下旬から6月上旬頃になりそうです。

5月初めには山の鼻V.C.も開館し、この機関誌が発行されている頃には、尾瀬でのいろいろな情報発信をしていますので、尾瀬探勝に来られる際はぜひお立ち寄り下さい。何か新しいものを発見できるかもしれません。スタッフ一同皆様をお待ちしています。

尾瀬山の鼻ビジターセンター



▲リスとウサギの足跡



▲山の鼻ビジターセンターでの除雪作業

おこじょだより

2007年尾瀬沼のシーズンが始まりました

例年になく雪が少なく、今シーズンは、いつもより早くビジターセンターをオープンすることになり、4月29日に上山、5月1日に開館しました。はじめは事務局職員2人体制でしたが、5月9日には管理員が上山し全員が揃いました。入山者は少ない状況でしたが、上空にはイワツバメが飛来し私たちを歓迎してくれました。

雪が少ないとはいえ、上山したときにはやはり雪の量に圧倒されました。しかし、今年の雪のとけかたには日一日と変化があり、特に尾瀬沼の氷が徐々ととけていく様子は毎日違いを感じ、その変化を間近で楽しむ

ことができました。

ゴールデンウィークはそこそこの賑わいがありました。望遠鏡で燧ヶ岳を見ますと、スキーを楽しむ人、山頂からの眺望を楽しむ人など、思い思いに尾瀬を満喫している様子が窺えました。また、今シーズンから尾瀬沼地区のキャンプ場が3年ぶりに再開されました。まだ雪が残っていましたが、すでに何人かのハイカーがテントを張って、早春の尾瀬を楽しんでいました。

湿原では、入山者の来訪を待っているかのように徐々にミズバショウが咲きはじめ、木道も顔を出しはじめました。

尾瀬では、春はミズバショウ、リュウキンカ、木々の新緑、初夏はワタスゲの白い穂、夏はニッコウキスゲ、コバギボウシ、キンコウカ、そして秋はエゾリンドウ、くまじしじ草紅葉、こじしじ山々の紅葉

と、尾瀬のシーズンは移ろいでいきます。

ビジターセンターでは、朝夕の自然観察会、スライド上映会、尾瀬沼のマルチスライドの上映、自然情報や公共交通機関の案内、オコジヨ発見マップの表示などを行っております。(見つけたら教えてください。オコジヨ発見証を差し上げます。)



▲5月上旬の尾瀬沼の様子

尾瀬を訪れる入山者の皆様、尾瀬関係者の皆様、21世紀の新しい国立公園となる尾瀬、そして尾瀬沼ビジターセンターを今シーズンもよろしくお願いいたします。

尾瀬沼ビジターセンター



▲オコジヨ発見証

守

り受け継がれてきた歌舞伎上演が近づくにつれ、村民が

豊かな自然に抱かれた檜枝岐村は、260余年の間、村民により受け継がれてきた歌舞伎と温泉、山人料理の村です。衣装作りや化粧まですべてを村民が行い、育てきた一座、千葉之家花駒座9代目座長の星利弘さんにお話を伺いました。

「檜枝岐歌舞伎の起こりは、その昔、先祖が伊勢神宮へ参拝した際に、江戸で見た歌舞伎を見よう見まねで村に伝えたのがきっかけだったようです」と上演当日の舞台準備をしながら星さんが話してくれました。いつもは舞殿(国指定重要有形民俗文化財)で行われる歌舞伎も、取材を行った4月は村の公民館で上演されました。

「檜枝岐歌舞伎は毎年5月12日と8月18日に行っています。これは出作りといって、夏の作業場へと村民が移り住む季節に、みんなが集まるきっかけとして決められたようです。今ではお宮様相手に9月第一土曜日にも上演しています。今回の4月上演は、役替えした春から稽古を積んできた演目の初披露の場なので」と星さん。



▲化粧や着付けも座員が協力し合って行う

歩いて公民館にやって来ました。持寄ったお弁当を手早く並べる婦人部の方々、受付で「花」と呼ばれる祝儀を書いて張り出すために筆を持つ方など、すべての村人が歌舞伎を支えている様子が見て取れます。「私が40年も歌舞伎を続けてこれたのも、村の人たちに支えられながら、しいに歌舞伎を守っていかなくてはならないという気持ちが強くなっていったからです」と歌舞伎をはじめた頃を振り返って話してくれた星さん。

歌舞伎を始めたきっかけを伺うと「22歳で役場職員となり地元青年団の代表をしていたが、当時、座員が少なかった花駒座を残したい一心で、言い出しつべの自分が座員になった。座員が少なかった分、いきなり大役を任せられ、初舞台前夜は全く眠れな



▲寿式三番叟後に口上を行う星さん(右)

かった」と、今では34名の座員が集うまでになった星さんの苦労が窺えました。

歌 舞伎を演じるということ
舞台では幕開けに行われる寿式三番叟の舞が演じられています。五穀豊穡と舞台を清めるため、堂々と演じる座員の星雄介さんは中学3年生だという。

「歌舞伎は自分からやろうとする気持ちが一番大切です。もちろん気持ちだけでなく、昔から「一・口上、二・眼、三・振り」といって、声量と台詞回しが最も重要だと教えられてきました。屋外の舞殿は室内よりも声が通りづらいので、5月の奉納歌舞伎に向けてまだまだ稽古が必要ですよ」と厳しいながらも、少し安心した表情で星さんが話してくれました。



▲「奥州安達ヶ原 文治郎の段」の一コマ

その後も拍手喝采の中で2演目が上演され、約2時間の歌舞伎が終演となりました。片づけを行う星さんに今後の目標を伺うと、「これまでの40年間は自分自身の苦労でやってこれた。これから10年は檜枝岐村に若い人が戻り、歌舞伎も担ってもらえるような運営を心がけていきたい」と歌舞伎の村ならではの、自らが歴史の一部として、次代へと繋ぐ事の大切さを星さんは教えてくれました。

ちばのやまなごまき
千葉之家花駒座
(檜枝岐村下ノ原887)

■問合せ先
0241-75-2342
(檜枝岐村教育委員会内)

■上演日(平成19年)
5月12日
8月18日17:30~(無料)
9月1日18:30~(有料)

※公演の問い合わせ先
尾瀬檜枝岐温泉観光案内所
0241-75-2432

尾瀬ヶ原東端にある見晴地区は、6軒の山小屋が建ち並び、シーズン中には多くの登山者が訪れる活気あふれた場所です。今回はそんな見晴地区で、山小屋と喫茶店を経営し、ほっと息つける空間を提供している、原の小屋の星菊芳・幸代ご夫妻にお話を伺いました。

夏

休みの思い出

「この小屋は私の父・幸徳が昭和33年に建てたのがはじまりです。父は尾瀬沼の沼尻でそば屋を経営していました。当時は尾瀬登山者が多くなってきた頃でしたから、見晴での山小屋経営を始めたようです。今年の尾瀬シーズンを間近に控えた星さんが話し始めてくれました。」「山小屋経営が始まった頃は私も小学生でしたから、夏休みになると尾瀬へ上がりました。ちょうど同級生の両親も見晴で山小屋をやっていたので、一緒に川遊びをしたり、一日がかりでアヤマ平へハイキングをしたりして過ごしました」

忙

しかなかった山小屋仕事

高校生くらいから山小屋で働くようになった星さん。本格的に小屋を切り盛りするようになったのは高校卒業と同時でした。



▲建築当時の面影を残す、原の小屋本館

「父が高齢だったこともあり、卒業と同時に山小屋に入ることを決めていました」と星さん。

「当時は長期保存の良く食料や、すぐに暖まる石油ファンヒーターのような便利な物はなく、すべてを自分たちで作らなくてはいけない時代でした。小屋に宿泊される方も多く、朝早くから夜遅くまで動きつめの毎日でした。私たちはともかく、畳1枚に2人で寝ていた状況だったお客様は大変だったでしょうね」と話す星さん。

こ

だわりの有機野菜

ある登山者からこの小屋の魅力は静かな雰囲気と、美味しい料理だと聞いたことがあった。料理にはどんな工夫がされているのだろうか。「私たち夫婦はヘルシー志向なん

です。小屋にお泊りになる方の大半が中高年者で、健康にも気を使っていると思うのですが、私たちは自宅がある檜枝岐村に畑を持ち、有機野菜を作って、小屋の食事としてお出ししています。山小屋で出た生ゴミは処理機にかけ堆肥として畑に戻しています。冷涼な気候の檜枝岐村では美味しい野菜が採れると評判ですが、中でもジャガイモの味には自信がありますよ」と、こだわりの野菜作りについて、横で聞いていた奥様が嬉しそうに話してくれました。

ゆ

つたりのんびりを大切に

「今年は星さんが小屋主となって40年目。精神的な余裕が山小屋の雰囲気作りにも役立つているという。」「以前は時間も余裕も無かったのですが、今では何気ない会話から始まる家族的なお付き合いを大切にしたいと考えています。自分に無理を掛けると、どこかに無茶が出てしまいますから、私たちがゆっくりのんびりを実践し、サービス向上を心がけています」

「出来るだけ静かな日を選んで、ゆっくりと歩いてもいいですね。尾瀬内に宿泊し、神秘的な朝霧・夕焼けの景色や、降ってくるような満天の星空を見ていただきたいです。決して他では見ることの出来ない本物の自然があります。そういった早朝の野鳥の声の多さにもびっくりすると思いますよ。私たちもフロントに野鳥図鑑をおいて勉強中ですよ」と星さんご夫妻が顔をみ合わせ、

「出来るだけ静かな日を選んで、ゆっくりと歩いてもいいですね。尾瀬内に宿泊し、神秘的な朝霧・夕焼けの景色や、降ってくるような満天の星空を見ていただきたいです。決して他では見ることの出来ない本物の自然があります。そういった早朝の野鳥の声の多さにもびっくりすると思いますよ。私たちもフロントに野鳥図鑑をおいて勉強中ですよ」と星さんご夫妻が顔をみ合わせ、



▲星さんご夫妻と孫の美里ちゃん

原の小屋

(檜枝岐村盛ヶ岳)

- 問合せ先
090-8921-8314
- 宿泊料金
1泊2食8,500円
- 営業期間(平成19年)
5月19日～10月15日
- URL
<http://www.ne.jp/asahi/oze/harano/koye/index.html>

尾瀬ボランティア情報

このコーナーは尾瀬ボランティアに登録されている方のためのページです。

活動に参加を御希望の方は、電話またはメールで、財団事務局まで御連絡ください。

○至仏山東面登山道踏み込み防止柵設置

登山道に保護柵を設置し、登山道脇の植生への踏み込みを防止します。

- ・日 時／平成19年6月17日(日)9時～15時
- ・場 所／尾瀬山の鼻ビジターセンター前

○巡回清掃

入山者に「ごみ持ち帰り」を周知するなど、マナー啓発を行う。参加者はごみ袋、軍手、火ばさみを持参してください。

尾瀬ヶ原

- ・日 時／平成19年6月24日(日)9時～14時
- ・場 所／尾瀬山の鼻ビジターセンター前

尾瀬沼

- ・日 時／平成19年7月22日(日)9時～13時
- ・場 所／尾瀬沼ビジターセンター前

○ボランティア講座

尾瀬の研究者による講座を受講するとともに入山口啓発活動を行います。詳細は、近日中にボランティア専用ホームページでお知らせします。

- ・日 時／6月30日(土)12時～7月1日(日)13時
- ・場 所／尾瀬山の鼻ビジターセンターレクチャールーム

なお、宿泊費・資料代等1万円がかかります。申込者には後日、詳細資料を送付します。また、30日夜には参加者交流会を行いますので振るって御参加ください。

※何れの活動も雨天決行ですが、事故等の危険が懸念される場合は中止し、参加者には2日前までに電話連絡します。



▲至仏山東面登山道柵立て作業

「友の会」コーナー

このコーナーは、「友の会」会員の皆様で作るページにしたいと考えております。

「友の会」は豊かな尾瀬の自然を守る財団の活動を支援して下さる方々の集まりです。入会を希望される方は、財団に電話(027-220-4431)、メール(ozetomonokai@oze-fnd.or.jp)で御連絡ください。入会案内をお送りします。

★賛助会員の御紹介(4月末現在)

株式会社 エーゼット様、大内荘久様、(有)久我山カメラハウス様、株式会社 サン・ペンディング東北様、尾瀬の雪どけ 龍神酒造様、中屋商事株式会社様、株式会社星組様、株式会社毎日企画サービス様

尾瀬保護財団「友の会」会員募集!

- 年会費(入会時から年度末まで)
- ・個人会員1口 2千円 ・賛助会員(法人・団体) 1口 1万円
- 会員特典
- ・財団機関誌「はるかな尾瀬」を送付(年4回)
- ・入会記念品(卓上フォトカレンダー)を送付
- ・尾瀬の山小屋・周辺旅館・民宿の宿泊料金が1割引(組合加入の宿のみ、休前日等対象外)
- ・財団販売品を会員価格で提供



※皆様の尾瀬に関する話題・思い出・御意見など何でも結構ですので、とどしとお寄せください。

イベント情報

尾瀬山の鼻ビジターセンター

○スライドショー

時間 19時00分～19時40分

場所 ビジターセンターレクチャールーム

実施日 6月1、2、3、8、9、10、15、16、22、23、30日

7月6、7、14、15、19、20、21、22、26、27、28、29日

○朝の自然観察会

時間 7時15分～8時00分

場所 山の鼻研究見本園

実施日 6月2、3、9、10、16、17、23、24日

7月7、8、14、15、16、21、22、28、29日

○昼の自然観察会

時間 10時15分～11時00分

場所 山の鼻研究見本園

実施日 6月5、6、7、12、13、14、19、20、21日

7月10、11、12、17、18、19、24、25、26、31日

尾瀬沼ビジターセンター

○スライドショー

時間 19時00分～19時40分

場所 ビジターセンターレクチャールーム

実施日 6月1、2、3、8、9、10、15、16、17、22、23、24、29、30日

7月1、6、7、8、13、14、15、20、21、22、27、28、29日

○朝夕の自然観察会

時間 7時00分～7時40分

16時00分～16時40分

場所 大江湿原

実施日 6月1、2、3、8、9、10、15、16、17、22、23、24、29、30日

7月1、6、7、8、13、14、15、20、21、22、27、28、29日

25周年をたしの尾瀬写真展

○新潟魚沼展

日時 6月1～14日 9時00分～18時00分

場所 魚沼市地域振興センター2階

(道の駅「ゆのたに」内) 025-792-7535

※6月3日 14時00分～15時00分 尾瀬スライドショー開催

○新潟胎内展

日時 6月20～26日 9時00分～18時00分

場所 胎内市産業文化会館 025-443-6400

※6月24日 14時00分～15時00分 尾瀬スライドショー開催

寄付のお願い



尾瀬保護財団では広く寄付をお願いしております。皆様からの貴重な寄付は、入山口におけるマナー啓発、自然解説、植生復元、公衆トイレの維持管理、調査研究事業など、尾瀬を守るための尾瀬保護財団の活動に活かされます。

寄付につきましては、財団事務局(群馬県庁17階・027-220-4431)に御来訪されるか、次の口座にお振り込みをお願いいたします。

なお、尾瀬保護財団は「特定公益増進法人」に指定されており、当財団への寄付については税の優遇措置が受けられます。

お振込口座のご案内

■群馬銀行 県庁支店 普通 0515428	■東和銀行 本店営業部 普通 975531
■東邦銀行 県庁支店 普通 1078095	■福島銀行 本店営業部 普通 590088
■大東銀行 福島支店 普通 1287138	■第四銀行 県庁支店 普通 1182791
■北越銀行 県庁支店 普通 199366	■大光銀行 新潟支店 普通 837334

新職員紹介

—今年度より新しい仲間が加わりました—

◆尾瀬山の鼻ビジターセンター勤務



石田 義則(いたよしのお)

「自然解説を通じた多くの出会いを楽しみにしています。尾瀬での素晴らしい体験のお手伝いができれば幸いです。」



佐藤 美幸(さとう みゆき)

「尾瀬に来るのは今回が初めての初心者です。尾瀬をじっくり体験して、自慢できるような経験を沢山したいです。」



根岸 理佳子(ねぎしりかこ)

「環境教育を担当します。1年目の今年度は、尾瀬を楽しみながら、私なりの視点を養うことが目標です。」

◆尾瀬沼ビジターセンター勤務



赤塚 淳(あかつかじゅんいち)

「山に登り始めて10年。その間尾瀬に訪れること10数回。尾瀬に恩返しができることがうれしいです。」

編集後記

山の鼻・尾瀬沼両ビジターセンターも5月1日からオープンしました。6月はじめにはミズバショウが満開になるのではないのでしょうか。昨年度から、「尾瀬通信」を発行してまいりましたが、新年度を迎え、名称を変え、内容も更に充実させ、機関誌「はるかな尾瀬」としました。皆様の御感想をお待ちしております。

(清)

みんなの尾瀬を

みんなで守り

みんな楽しんで

「尾瀬ビジョン」基本理念